

# 「君死にたまふことなかれ」 与謝野晶子の春秋

秦 郁彦

## 第三回

### ●時流を生き抜いて

明治後半から昭和初年にかけて、与謝野晶子は押しも押されぬ歌壇の大スターとして不動の地位を築いた。

ロマン主義の『明星』は自然主義の新潮流に押されて廃刊となったが、彼女は次々に単著の歌集を発表、溢れる才気と華麗な情熱に円熟味も加わり、人々は瞠目した。

そのひとつに斎藤茂吉が「歌壇を震動させた」と評した、

鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は

美男におはす夏木立かな

がある。自在な発想の極致と言えようか。

詩歌の分野だけではない。大正デモクラシーの風潮を背景に、女子教育や婦人参政権に至る社会的発言を求められる機会も増え、彼女も新聞、雑誌やファンの要請へ小まめに応じる。論争も厭わなかった。国による母性保護を唱えた平塚らいてうに対し、晶子は自立する女性の姿を説き譲らなかったが、らいてうがフェミニズム運動の元祖と見なされる『青鞥』を発刊した時は、「山の動く日来る」と応援歌を寄せた。

昂然として社会問題に立ち向かう彼女の自負は「劫初より作りいとなむ殿堂に、われも黄金の釘一つ打つ」（大正十一年）に示されているが、日本はほぼ局外に立ったとはいえ第一次世界大戦（一九一四―一八）の惨状を黙過することはできなかった。次に二首（いずれも一九二〇年）を引用したい。

更にまた我等の血をば求むなり

平和の仮面をつけた戦ひ

女より智慧ありといふ男達

この戦ひを歇めぬ賢こさ

ここに示された晶子は、もはや「君死にたまふことなかれ」のナ

イーブな情の人ではなく、辛辣で剛直な反戦思想家と評してよいのではあるまいか。しかし、同調にせよ批判にせよ注目した論者はいなかった。年に一千首ペースとされた歌の洪水にとりまぎれてしまったのかもしれない。それほど彼女の私生活は多事多端をきわめていた。

詩歌集、評論、随想、童話、小説まででかけ、講演、短冊、歌扇かせん、校歌の作詞、屏風から個別の添削に至るまで引き受け、十一人の子女を生み育て、男子五人の全員を大学まで進ませたのは想像を絶する忙しさだったにちがいない。いつとはなしに与謝野家の経済は晶子が支えるようになっていた。

明治四四年に鉄幹がフランスに外遊したときの旅費も、彼女が捻出したとされる。そして半年後に晶子も夫を追って渡仏した。二人でパリ郊外へ遊んだとき、

あゝ皐月佛蘭西の野は火の色す

君も雛罌粟われも雛罌粟

と詠んだ（コクリコはひなげし）。円熟期の絶唱と評せよう。

数年後に二人は中国大陸にも旅しているが、売れっ子になっても晶子は夫を立て、師弟の礼を忘れなかったようだ。大正一〇年にわ

が国では最初の男女共学とされる文化学院が創立され、晶子は学監に就任、慶應大学教授になっていた鉄幹も大学部本科長を兼任する。

しかし昭和六年の満州事変を発端に、日本は軍国主義とファシズムへの道へ踏み出し、一二年には日中の全面戦争へ突入する。かつての日露開戦期を思わせる風潮のなかで、夫妻の姿勢も徐々に変わっていく。

昭和七年の第一次上海事変で、爆弾三勇士の軍国美談に世論が湧きたつと、鉄幹は新聞社の公募に応じ「仁義の軍に捧げたる……壮烈無比の三勇士」と歌い、一等に入選した。

晶子も満州事変を「非常手段の自衛策」と容認したが、時局への発言は控えがちとなる。そして同人や弟子たちに囲まれての歌会や旅行を楽しみ、『新々訳源氏物語』（一三年刊）の執筆に没頭した。

昭和一〇年に夫と死別したが、晶子も病気がちの日々を送る。一年には駕籠で鞍馬山の急坂を登ったり、四男、五男、長女、六女の四人が結婚するなどのせわしさだったが、五月に脳溢血で倒れ、半身不随となる。それでも作歌は細々とつづけた。

翌年の一二月七日は晶子の六十三回目の誕生日だった。荻窪の自宅で同居していた外務省課長の秀夫妻が催した内輪の祝賀宴に晶子は車椅子で食堂に運ばれ、客に挨拶した。

日米開戦の大本営発表が流れたのは、その翌日だったが、直後に

『短歌研究』誌の昭和一七年一月号は「宣戦の詔勅を拝して……実に全国民の感激に燃えたった歴史的な日」（編集後記）にちなむ特集を組む。「現代歌壇を代表される方々」二十人の作品を数首ずつ並べたが、そのなかから、まず男性歌人のいくつかを引用してみたい（斎藤茂吉は『文藝』の昭和一七年新年号から）。

ルーズヴェルト大統領を新しき

世界の面前に撃ちのめすべし（土岐善麿）

大詔を宣明する東條首相の全身は

声になりてひびく（金子薫園）

大詔（おおみこと）かしくみまつり一億の

御民（みたま）の心炎とし燃ゆ（佐佐木信綱）

勝たむ勝たむかならず勝たむ

かくおもひ微臣のわれも拳握るも（吉井勇）

何なれや心おごれる老大の耄碌国

を撃ちてしやまむ（斎藤茂吉）

今よりは日本洋と名をかへむ

御国のものぞ太平洋は  
(尾上柴舟)

おしなべて品格の欠けた楽天的な大言壮語ばかりで、世界一の大国を相手どった大戦争への不安や焦燥はみじんも感じられない。昭和二〇年の敗戦後は気恥しさが先に立って、読み返す人はいなかったのではないか。

● 「水軍の大尉」となったアウギユスト

そこへいくと、ただ一人の女流歌人だった晶子の六首（A～F）は一味ちがう。内輪の歌誌『冬柏』とうはくの一七年一月号に投稿した一首（G）を加え、次に列記したい。

A み軍いくさの詔書の前に涙落つ

代は酷寒に入る師走にて

B 水軍の大尉となりて我が四郎

み軍にゆくたけく戦へ

C 子が船の黒潮超えて戦はん

日もかひなしや病する母

D 子がのれるみ軍船のおとなひを

待つにもあらず武運あれかし

E 強きかな天を恐れず地に恥じぬ

戦をすなるますらたけをは

F 日の本の大宰相も病む我も

同じ涙す大さ詔書に

G 戦ある太平洋の西南を思ひて

われは寒き夜を泣く

この七首は、戦地に息子を送っていた母親なら誰でも詠みそうな  
ありふれた歌ぞろいで、敗戦と同時に忘れ去られてもふしぎはない。  
だが戦後すぐに復活した晶子ブームのなかで、「君死にたまふことな  
かれ」をB「水軍の大尉となりて……」やE「強きかな……」と対  
比して、かつての「反戦詩人」から「好戦」ないし「戦争協力者」

へ転向した「証拠」と見なす隠微な動きが起きた。

それに対し晶子の弟子筋や信奉者のなかから、反論めいた擁護論も出た。数例を表2（本稿末尾）にかかげたが、当惑気味で歯切れが悪いせいか公開論争には発展しなかった。

マスコミや教科書会社も、「あら探し」と誤認されるのを恐れてか、おおむね知らぬ顔で通してきた。唯一かと思われる例外は、一九九一年の朝日新聞に「晩年の与謝野晶子――我が四郎……たけく戦へ」の見出しで香内信子かないが発表した論稿である。

香内は男子の大物歌人たちに比べれば「晶子の歌は暗く、一まつ不安をたたえた沈んだ歌」と評す。しかしそれ以上に踏みこむのは避け、「家族愛だけに縮小してしまっているのはなぜ」と自問し、「歴史の流れとは無縁ではありえなかった」と自答した。病中の晶子は滔々たる軍国主義の時流にあらがう勇氣を持てなかったのだ、と暗示したのかもしれない。

そこで筆者なりの考察を示すにあたり、突出したかに見えるBにこだわらず、七首全体をセットとして眺める必要性を強調したい。

まず七首のキーワードを拾うと、「戦」の五か所は別として、「詔書」や「病」、「寒さ」、「涙」が各二か所、「泣く」が一か所で、たしかに暗さと不安の印象はぬぐえない。

七首のうちBCDの三首は、対象が息子の四郎を指すのはたしか

だが、ストレートに戦意高揚を説いたEや、主戦場の西南太平洋への出動を想定したかのようなGを加えてよいのかもしれない。

晶子の主たる関心が広義の「家族愛」に向けられていることを立証するかのようだが、「たけく戦へ」と激励しているBと、「寒き夜を泣く」のGが同居しているのは何とも不自然で、わかりにくい。

それ以上にわかりにくいのは、AとFで開戦詔書に本人ばかりか首相までが流す涙の含意だ。Aの涙は寒々としていて喜びの涙ではありえず、むしろ悲しみの涙と解すれば、それを時の東條陸軍大將へ押しつける名分は開戦詔書しかありえない。

その詔書には「豈朕が志ならむや」という文言が入っていた。「本当は戦いたくないのだが――」と読みとれる内情を、一月一日の御前会議が対米英戦を決した直後に東條首相が広橋真光秘書官へ述べた要旨を広橋の記録（『東條内閣総理大臣機密記録』）から引用したい。

お上より……仲々お許しがなく、漸く已むを得ないと仰せられた時、ほんとお上は真から平和を愛し大事にしておられることを知った……宣戦の大詔に豈朕が志ならんやとはお上が特に仰せられて挿入した文句である。

晶子がどこまで昭和天皇の憂慮を察知しえたかは不明だが、かつて日本を「亜米利加の富なくて亜米利加化する国」と洞察した晶子は、勝算のない対米戦への不安を隠さず、詔書を隠れみのにして首相の反省を促したとも考えられよう。それは深尾須磨子の言う「不可抗な超人的圧力」をかわず知恵を兼ねたのかもしれない。ともあれ、四か月後の一七年五月、晶子は病没し戦争の行く末を見届けることはなかった。

### ●与謝野晶子は厭戦論者？

ところで日露戦争では心配するのは弟だけであったが、日米戦争に突入したとき病身の老女になっていた六十三歳の晶子には、身上を案じるゝ適齢期ゝの息子が五人（別に六男は夭逝）もいた。

長男の光は四十一歳の医師で衛生行政の専門家、戦後に東京都衛生局長に就任するが、当時は公衆衛生院教授の任にあった。

二男の秀は外交官で、戦後にイタリア大使や東京オリンピックの事務総長となるが、当時は外務省欧亜局の課長だった。

三男の麟は三十六歳で満鉄に勤務した。

五男の健は昭和一五年に東京帝大法学部を卒業して、住友金属に就職（のち副社長）。

そして「水軍の大尉」に該当するのが四男の昱いぐだが、晶子夫妻が

パリでアトリエを訪問した彫刻家アウギュスト・ロダンとの縁で大正二年の生誕時にアウギュストと命名された。「アウギュスト アウギュスト 母の粗末な芸術なんか ああ何になろう」という詩で、ロダンへの傾倒ぶりが知れるが、本人は旧制静岡高校時代に昱と改名してしまう。晶子にとって思い入れの深い息子ではあった。

ここで四男の軌跡を追ってみると、昭和一三年に東京帝大工学部機械工学科を卒業して日本電気に就職したが、同時に海軍の造兵中尉に任ぜられ、呉海軍工廠ついで舞鶴工廠に配属された。内藤初穂『海軍技術戦記』によると、この年に創設された技術系（造船、造兵、造機の分科は一七年に技術科に統合）の短期現役士官の第一期生である。二年間を現役勤務したあと予備役に編入され、出身企業に戻れることになっていたが、海軍は陸軍に横取りされるのを嫌い、残留することを望んだ。

昱も一五年六月に造兵大尉へ昇進し予備役に編入されたが、ひきつづき海軍にとどまる。そして一六年一二月五日付で舞鶴から呉工廠付へ転勤となり、三日後に日米開戦の日を迎えた。

その後は山口県の光工廠に転勤したことが判明しているが、外地や軍艦に勤務した形跡はなく、技術大尉として終戦を迎えた。戦後は日本電気に復帰し、生産技術研究所長や宇宙開発本部長代理を歴任している。

このように見てくると、「水軍の大尉」とはいえ、第一線に向かう配置にはいなかった。「たけく戦へ」のイメージからはやや遠い。籌三郎の例と似た誤情報に振りまわされたのか、母親の一般的心情に寄り添うつもりだったのか、判定はむつかしい。

「岸壁の母」に代表されるように、母親たちの多くは戦場でわが子を失う悲哀を味わった。晶子のように、五人の息子の全員が一人も欠けず戦争を無事に乗り切ったのは、例外的な幸運と評してよいだろう。

詩人の日夏耿之介ひなつこうのすけは「晶子の才華は天の成せるもの」と評し、伝説上の詩聖サフォーの再来と讃嘆した。「あれも真実、これも真実」と割り切れば、晶子が残した数万の作品群を仕分けて個別に詮索するのは「木を見て森を見ない」弊になりかねない。必要な視点は、彼女の全体像をとらえた上で生涯を通じての通奏低音を引き出すことではないかと私は考える。

ヒントを与えてくれるのは、音楽家の兼常清佐かねつねきよすけが抽出した次のような三つの低音である。

### 1. 女性解放と自立

### 2. 宗教的情緒の排除

### 3・戦争に対する激しい憎悪

多少の解説を加えると、1は「みだれ髪」に始まる晶子の生き方が体现している。2は仏教、キリスト教等の既成宗教だけでなく、国家主義、社会主義などのイデオロギーにほぼ無縁な生涯を貫いたことを指す。

3は「人間のする悪事で戦争ほどの悪事はない」（大正六年）という思い切った認識から来ていた。良い戦争か、悪い戦争かを区別する余地のない認識から択ぶ道は反戦しかなかったといえよう。

反戦と言っても、反戦、不戦、非戦、避戦、厭戦と語感、語義が微妙に違う類似語がある。晶子の短い詩歌から位置づけるのはむづかしいが、晩年の七首は敗戦を予見してか、厭戦の気分が通底しているように思われる。戦後日本における反戦思想の主流が厭戦だとすれば、晶子はそれを先取りしていたのかもしれない。

与謝野秀の長男で晶子の孫に当たる馨（一九三八―二〇一七、元財務大臣）は、二〇一四年の産経新聞紙上での今野寿美（宮中歌会始の選者）との対談で「一番好きな晶子の歌は」と聞かれ、墓前の歌碑に刻まれている次の歌を挙げている。転記して拙稿を終わりたい。

臯月よし野山のわか葉光満ち

末も終りもなき世の如く

● 主要参考文献

入江春行『晶子の周辺』（洋々社、一九八一）

兼常清佐『与謝野晶子』（三笠書房、一九四八）

今野寿美『24のキーワードで読む与謝野晶子』（本阿弥書店、二〇〇五）

香内信子『与謝野晶子と周辺の人びと』（創樹社、一九九八）

香内信子『与謝野晶子——さまざまな道程』（一穂社、二〇〇五）

『東條内閣総理大臣機密記録』（東京大学出版会、一九九〇）

平子恭子『与謝野晶子』（河出書房新社、一九九五）

深尾須磨子『与謝野晶子』（人物往来社、一九六八）

深尾須磨子『君死にたまふことなかれ』（改造社、一九四九）

山本藤枝『黄金の釘を打った人』（講談社、一九八五）

与謝野晶子『私の生ひ立ち』（刊行社、一九八五）

与謝野光『晶子と寛の思い出』（思文閣出版、一九九一）

評者	出典	評言
深尾須磨子	『与謝野晶子』(1968年)	「何が晶子ほどの人に、このような心苦しい歌を書かせたか?」「不可抗な超人的圧力(に屈した)」
山本藤枝	『黄金の釘を打った人』(1985年)	「なんという『身辺雑記』風なのだろう」
香内信子	「朝日新聞」1991年5月28日付	(本文参照)
与謝野光	『晶子と寛の思い出』(1991年)	「『涙をじつとこらえて、雄々しく征きなさい』という心情か」
育鵬社版中学教科書	2012年度採択	「君死にたまふことなかれ」と併記